深重（じんじゅう）の海

津本 陽

新潮社

深重の海

津本 陽

新潮社

津本　陽

昭和4年、和歌山市に生れる
昭和40年、VIKINGの同人となる
昭和53年、第79回直木賞を受賞
現在、和歌山市に住む

深重の海

昭和五十三年八月十五日　印刷
昭和五十三年八月二十日　発行

定価　七八〇円

著者　津本　陽
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話（業務部）〇三二二六六一五一一一
（編集部）〇三二二六六一五四一一
振替　東京　四一八〇八番

印刷　大日本印刷株式会社
製本　神田加藤製本

© Yō Tsumoto, 1978 Printed in Japan.
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

深重(じんじゅう)の海

たとい罪業は深重なりとも必ず
弥陀如来はすくいましますべし
――蓮如上人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　章

孫才次は二番鶏が鳴いたあと母のぶんに揺りおこされ、灯芯のゆらめく明りのなかで朝食のいけじゃと、前日の夕食の残りものであるうでた克鯨の腸を手早く喉へ流しこんだ。

口を動かしながら、彼は肌に触れる空気が温かく和んでいるのに気づいていた。今日は荒れるかも分らんと、横目で明けはなした入口のほうを見た。

入口のくつぬぎの上に、祖父の近太夫が腰をおろしていた。分厚い厚司を着た背中がこゆるぎもせず、風の落ちた闇を眺めている。

近太夫が息をひそめ、天候を計っているのは家族の誰もが知っており、邪魔をしないように物音を盗んで立居をした。

闇を低く劃って灌木の密生した向島岬が南北に伸びており、その上の空にまいたような星屑の輝やきが、ふだんより強いことに近太夫は気づいていた。朝星が輝やいた日は、やがて西風が荒れてくる。

近太夫は、皺の深い赭顔をわずかにしかめ、胸のうちに焦慮のあつい流れが湧きおこるのに堪えた。

今日は明治十一年も押し詰った十二月の二十四日、今年もあますところ七日しかない。今日も不漁なら、もうどうにもなるまい。太地村三千の住人は、一文の金も持たずに節季を越さな仕方ない。来年になれば、鯨方の舟の半数以上は借金の抵当にとられ、娘たちが身売りをして村から消えてゆく……。

近太夫は獅子のように魁偉な体軀が、痺れる疲労に浸されているのを感じていた。彼は近頃しつこい不眠に悩まされていた。年初から九月までに十九頭の鯨がとれたが、そのあと一頭の獲物もなかった。

気を静めな悪行きやぞ、と近太夫は頭をふった。日をはねかえす波頭にまで腹のたつとき、ろくな漁のあったためしがない。

飯を終えた孫才次は、いつもの朝と変らず、今日こそはと意気ごみに燃える。今日こそは、紫紺の海をかきわけて鯨がやってくる、と彼は理由のない期待に胸をふくらます。なにしろ、いわし鯨一頭で千円、抹香で二千円、背美の大物なら三千円じゃ。米なら一升二銭五厘やさか、何俵買えるか見当もつかん。麦買や一銭五厘じょ。一頭でええ、とれたら太地じゅうの人間がたすかる。いまは貧乏でも、鯨

さえ湧いてきたらわいらはお大尽や。北東風が吹こうと南風が吹こうと怖いものはない、俺は命も惜しないんじゃ、と孫才次は目を光らす。

彼がはじめて鯨を目のあたりにしたのは八歳の春であった。樽舟で綱を運んでいた彼は、いきなり目のまえに湧きあがった十五間の抹香鯨に仰天した。黒い巨大なものは、不気味にすばやく動くことで動物であることを示していた。八幡神社の大屋根のような尾羽が、轟音をたて海面をうった。百数十本の綱の尾を引いた銛を背負いこんだ背の皮膚は、ぬれているのに光沢がなく、黒ずんだ樹皮のようで、無数の傷痕が白い線を引いている。ふじつぼの類が盛りあがるようについている部分がある。息づまる潮煙のなかで、彼は胴体のなかに、せわしくまたたいている目を見つけた。それは巨軀には不似合いに小さく、丘に寝ころんでいる小人の目のように見えたが、孫才次の体をしびれさす光りを放っていた。

突進してくる鯨に舟を破られるまえに樽舟の大人たちは海へ飛びこみ、孫才次も誰かに抱えられて続いたが、そのまえの瞬きするほどの間に見た鯨に、彼はその後長く脅やかされた。

夜眠るまえ、瞼を閉じると玩具のように小さな鯨が浮かぶ。孫才次はそれを一本の箸で支え、皿まわしのように回さねばならない。回すうちに鯨の丈が伸びてくる。家よりも大きくなり、際限もない雲の塊のようになる。それでも孫才次は細い箸で鯨を支えていなくてはならぬ。目がくらみ、押しつぶされると彼は悲鳴をあげた。

「鯨は神さんかい、幽霊かい、婆あよ」

孫才次はいよにたずねた。

「神さんでも、もよろでもない。ただの生物や。お前んのおやじもそのまえのおやじも、そのまたまえのおやじも、ずうっと昔から、鯨を取って生きてきた。それは親様がそうせえと教せてくれなはったからじゃ。鯨は、わしにくわれて成仏せえちゅうて、取ったらなんまんだぶと拝んだら、それでええんじゃ。殺生の罪は、それで親様がゆるしてくれる」

いよは事もなげにいったが、孫才次にとりついた恐れは消えなかった。それいらい、恐怖に立ちむかうことが孫才次の生きがいになった。彼は穏和な性格の青年に成長したが、仲間のあいだでは、名うての乱暴者にも一目おかれていた。孫才次は怯えやすい自分の性質を恥じ、脅やかしにくるものから逃れる屈辱に堪えられなかったので、それに全力で立ちむかわねばならなかった。

「孫、支度はできたか」

近太夫が、白木綿袖長の厚司に着かえ土間に立った。孫

才次は赤褌を締めこんだ裸体に紺刺子の半纏を羽織り、白木綿の帯を締め、腰に刃渡り二尺に余る手形庖丁を差し、祖父の使う朱と青の彩色あざやかなさいやき筒をかついだ。

「息災で、ばっとばいた（うんと良い）初鯨をとって帰って下さいませ」

いよとぶんが、祈禱のような口調をそろえていい、切火を打った。

新屋敷横の坂を下りながら近太夫は、

「孫、庖丁は磨いであるか」

と聞く。孫才次は、「うん、磨ぎ立てた」と答える。しばらく歩くと、

「孫、庖丁の柄はかたいか。弛んだら命取りやぞ」

と聞かれる。「牛の角より固いわ」と孫才次は答えた。近太夫は孫才次を刺水主として鯨漁に伴うとき、この問いを欠かしたことはなかった。

三軒家の和田の岩屋を抜けると、音を立て燃えはじける幾百の鯨松明のかがやきが目をうち、舳を並べた三十艘の鯨舟の間を忙しく駆け、荷を積む男たちの呼びかわす声が騒がしくきこえた。

近太夫は孫才次を引きはなし、足早に歩みだす。彼は船団の安危を司る「沖合い」の厳しい顔つきになっていた。

「ご苦労でございます」という水主たちの挨拶にうなずきながら、近太夫は水の浦浜の中央に焚かれているかがり火の傍へ歩み寄った。

白厚司を着て下駄をはいた十六人の刃刺が床几にまたがり、炊夫からうけとった湯気の立つ汁椀を手にしていたが、近太夫をみると座を立って挨拶をした。

殺舟執当の玉太夫が、近太夫に近づきささやくようにいった。

「潮が高いようでよし」

潮位は数日まえから不気味に高まっていた。潮位の上昇は黒潮が沿岸に接近しているしるしで、やがてくる時化の予兆であった。

「無理せまいぞ。一番潮を計ろらよ」

近太夫は鷹のような目を据え、わずかに吹いてきた風を嗅ぎわけるようにした。

四艘の網舟が縦横四十間の苧網を十五反ずつ積み終ると「沖出やぞお」と艫押したちが声をそろえて叫んだ。刃刺たちは厚司をぬぎすて、白黒だんだらの大形縫合せの平襦袢をあらわした。

水主たちが十六艘の勢子舟をコロ台から擡ぎあげ、飛沫をあげて海面にならべた。勢子舟の船体は刀身に似た細身で、刃刺以下十五人が乗組む。八挺櫓仕立てで、高浪を突切るときも櫓が波を押えるので、転覆のおそれはすくなか

った。舟底は波浪の抵抗を減らすため平滑な漆塗である。網舟、持双舟各四艘、樽舟五艘、山見舟一艘はいずれも六挺櫓で十三人が乗組んでいた。

近太夫は勢子一番舟の舳に、刃刺の佐一郎と並んで座を占めた。彼は纜が解かれ、櫓が水に入ったのを見て、低く通る声音で、「よおよい」と音頭をとった。三百人の漁夫が、「えーい」と囃した。一番舟の艫押しが、「よいよかんとい」と甲高い声をはりあげると、「えーい」と囃しがどよめく。「もう一声じゃ」と艫押しが喚きたてる。「えーいよーおよーお、よーお」

切れめのなくなった櫓声が、湾内を圧してどよもすうちを、勢子舟が動きはじめた。船体は藍地に白と赤の菱形の地合いにいろどられ、絵模様は一番は桐に鳳凰、二番割菊、三番松竹梅、四番菊流し、五番蔦模様と極彩色に描かれていた。

灯明崎沖合いの網代（漁場）に、勢子舟が地番、中番、東番、南番、端番、張出しと陣形を張り、網舟、持双舟がその内側に配置を終えると、空の曖昧な斑点がしだいに雲の形をとりはじめ、しらじら明けの海岸線が浮かびあがってくる。山も海も、穏かで明朗な色彩を帯びていた。紀南の山野は厳冬にもつややかな緑を失わない。真珠色のかがやきを増してくる空の下で、そそり立つ岩礁の群れが、青絵具を溶いたような潮にとりまかれている。飛び交うかもめたちの外に動く物影はなかった。

海上に立ちこめる水蒸気を紅色に染め、陽が姿をあらわした。執当玉太夫の指揮する勢子二番舟に乗り組んだ孫才次は、遠眼鏡で水平線のあたりを見渡していた。風がなく、勢子舟の艫に立つ白い采旗もはためいていない。

半纏の背が日ざしのぬくもりを微かに伝えてきた。かもめが乾いた声で啼き、孫才次は不意に前夜寄子路の松林のなかで抱きあったゆきの柔らかい体のにおいを思いうかべ、頬に血をのぼせた。

前夜は二十三夜様を祀る晩であった。二十三夜様とは、不漁を解き、遭難から守護してくれる「じんぐうさま」のことであった。

孫才次はゆきと待ちあわせ、米の粉を練りかためた「おしらもち」と線香を檜のつけいらきにのせ海に流し、墨汁のように暗い海にゆっくりのぼってくる月に手をあわせた。

ゆきは孫才次の妹きみの親友であった。彼女の父である玉太夫が孫才次の父弥太夫とは兄弟の誼をかわす仲であったので、孫才次は二歳年下の彼女が前髪をあげない幼女の頃からかわいがり、面倒をみてやってきた。

ゆきに恋情を覚えたのは、いつの頃からであったのか、孫才次は覚えていない。彼女の顎から喉へかけての彎曲が

けざやかに白さを増し、胸と腰の隆起が着物を通してうかがえるようになると、孫才次は身内にたちふさがるどよめきで口が重くなり、気やすく話しかけられなくなった。
「兄ま、ゆきやんがなあ、お前んが何か怒ってるんとちがうかて、聞いてたでやあ」
きみがおかしげな顔でいうのに、「何も怒ってない」と腹を立てた口調でいい、頬に血がのぼるのにとまどった。
ゆきと再び言葉を交すようになったのは、五月の溢れる日ざしに樹脂のにおいが立ちこめる、梶取崎のビロウ林のなかであった。
裾みじかな単衣を着たゆきは、丈なすリュウビンタイの葉叢を分け、グミの籠を抱えてきた。遠くから目を見あわせ、孫才次は眩暈を覚えた。
ゆきは恥じらいの色を頬に散らし、かたい笑みを湛えて近づいてきた。孫才次は度を失い、わざと大股に歩み寄った。彼はいきなりゆきの籠のなかに盛りあがっている朱色のものをつかみとり口にいれる、自分でも思いがけない動作をし、その不様さを恥じ、芋酒を呑んだときのようにことめかみを脈うたせた。
ゆきはふくみ笑いをもらし、孫才次も赤く染めた口もとを弛めた。
そのあと間もなく、彼らは人目を避けてあいびきをするようになった。
前夜、ゆきは波に揺られながら遠ざかるつけうきにむかい、長いあいだ手をあわせていた。
「何を拝んだや」
「ええこと。明日は大漁で、正月にうけじゃを食べんでもええようになってほしいて」
正月にうけじゃかと、孫才次は遠眼鏡を膝におろし、思わず眉をひそめた。さつま芋と少量の米を水が蒸発してしまうまで炊きつめ、芋の表面に飯粒がはりついた食物は、貧苦のなかからうまれた太地の住民たちの常食であった。
「何じゃ、腹でもいたいか」
刺水主の相番である従兄の清七が、けげんそうに見た。
「いや、何でもない。清やん、俺やなぜかしらんが、今日は鯨とれるよな気いするんじゃ」
「そうならええがのう。俺はあかんと思うぞ。太地の網代にゃ、もう昔のようには鯨が来んようになったんじゃ。潮が変ったのにちがいないぞ。昔はあの森浦の沖でさえ、竪羽立てが見られたというにのう」
孫才次も近太夫から鯨の雌雄が腹をあわせて海面に横たわるように浮かび、互いの手羽を高々と空中に立てる交尾の有様を聞いたことがあった。
「そうときまったわけやなし、今日はひさしぶりに鯨尾に

網かけて、持双の先漕いで沖帰りできるか分らんぞ。きばろらよ」

「いや、あかん。村のお婆まらは師走に子供の着物一枚も買えんちゅうて、泣き泣き炊桶洗うとる。こんな物いりな網代張るより、沖ゴンドやカジキを追うたほうがええのじゃ」

小鼻の張った分厚い鼻梁に脂をためた従兄は、命知らずといっていいほど物おじしない楽天的な性質であったが、片沖合いをつとめていた父親が座頭鯨の手羽にはねられ命を落してから、鯨方の前途を暗くみている内心をかくさないようになっていた。

しかし、数すくないゴンドウ鯨や鮪を取ったところで、食料にするだけで、大鯨のように全村をうるおす現金収入をもたらしてくれるものではない。太地の産米はわずか百石であった。三千人の村民が百石の粃で生きてゆけるわけはない。鯨はたったひとつの救いの神じゃと孫才次は思った。

不意に舷が揺れ、孫才次は沖をふりかえった。舳の玉太夫が丁髷の刷毛先をいつか吹きはじめたゆるやかな西北風になびかせ、険しい目つきで同じ方向を睨んでいた。

左右に帯のように長い波が数本、沖から近づき、二里の幅で展開している鯨舟をゆらめかせ、陸のほうへ消え去った。海面は陽がかげるように明るい表情を消し、さざなみを立てはじめた。

「昼の満潮から物いうてくる（荒れてくる）かもわからんな」

玉太夫は流れの早まった海を見渡した。

「山立てよお（方角を決めよ）」

一番舟から指令がきこえ、流されはじめた船団は灯明崎を対象にきめた位置を動かないよう、櫓を使いはじめた。

網一番舟が「ひい、やあ」と櫓声をたて、網代の中央に滑るように出てゆき、静止した。刃刺が舷に身を乗り出し、垂縄を海中に下すのを、近太夫は注視していた。老練な刃刺は錘をつけた二十間の垂縄を海に入れ、指先に感じる圧迫で、正確に潮流の速度を計れた。

網舟は二ケ所で潮を計ったあと、もとの位置へ漕ぎもどった。しばらくして、一番と二番の網舟の艫に、灯明崎山見に潮流の速度を知らす黒い小旗がひるがえった。

「二本潮の上り潮じゃ」

水主たちの間に失望のざわめきが流れた。網張りの作業は、潮流がすこしも動かないときに行うのが上々吉、北に流れる下りの一本潮が次善の状況で二本潮では潮に流される網を押える苦労がふえてくる。三本潮になると殆どの場合、断念しなければならない。上り潮ではすべての場合作

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

業に困難がつきまとう。
潮流は午後になって弱まることは稀であった。朝から二番潮では漁はたぶん見込みがないと近太夫は思った。おだやかに吹いている西北風に東南風がまじりはじめ、時々突風がどっと吹きつのって顔に飛沫をあびせた。
「佐一郎、突風の吹く日いはの、連れ鯨がくるんやぞ」
「じゃあい（そうですか）。何でよし」
「お前らの爺まなら知ってたことじゃ。昔はそがなことが、ようあったんじゃ」
近太夫は、皺ひだのような目を更に細め、笑っていた。六十五歳の彼にとって、失望をかくすのは容易な業であった。
「おい炊夫、いまのうちに料理して皆に飯食わしとけ。荒れてきたら食えんど。空腹で鯨追うても、置いていかれるわい」
「おい旅水主の衆、ひとつええ喉聞かしちゃってよ。東南風に吹かれて揺れてても仕様ないわい」
近太夫は口早に水主たちに話しかけた。
喉自慢の他郷出稼ぎの水主が、甲高い声でうたいだし、聞き手は声をそろえて囃しをいれた。

〈明日は吉日砧打、明日は吉日砧打、おかた姫子も出てみやれ、何とさしたる枕やら、宵と夜中に目を覚ます、きぬた踊りはおもしろや、きぬた踊りはおもしろや

正月二日出初めの式に歌う綾踊り唄の節を、近太夫は覚えず追っている。先代鯨方棟梁和田覚右衛門の本方屋敷の広間で、和田一類、番所出役、刃刺、勘定方、大納屋、山見の主役が居流れ、金高蒔絵一升入の鯨盃を前後不覚に酔いしれるまで傾ける宴の光景が、彼の内部にひろがっていた。
師走ひとつきの間に、二十五頭の鯨を仕留めたこともあった。庭に鯨の頭を置き並べ、皆は狂ったように舞い踊った。潮を浴びても忽ち水玉を弾くつややかな肌の若い近太夫が刺水主たちの綾踊りの列に入り、紅白の綾に塗りわけた小石入りの竹筒を振り、急調子の手さばきに息をきらせている。
近太夫は夢想から覚め、歌いおさめた水主を、「妙、妙」と手を打ってほめそやす。彼は漁を半ば投げかけていた。百日も不漁が続くことは稀であった。ここまで運に見放されていて、年内に鯨がくるとは思えない。
和田家の経済が、村の衆に渡す越年の「つかわしもの」の米穀、金子の調達に困惑するほど窮迫している内状は知りつくしている。大阪の高利貸しから借りうけた金の利息払いさえ滞りがちであった。

蝦夷地での捕鯨が実現しておれば、わしもいまは楽隠居の身分でいられたかもしれないと、近太夫はぐちめいて過去をたぐってゆく。

嘉永年間、蝦夷地に鯨が甚だ多いという報せが、鯨肉出荷に大阪へ出向いた五十集舟の者からとどいた。太地鯨方では新宮藩と協議のうえ、棟梁和田伊織の叔父、太地伴十郎を長とし、六名の見届役を蝦夷に派した。不惑をひかえた男盛りの近太夫も一行に加わっていた。

彼らは、鯨方の休漁期にあたる四月より九月までの間、北海道西沿岸の雲霧を分け視察した。実状は伝聞を遙かに上回っていた。ヤマコシナイ、モロラン、ホロベツ、タルナイ、ユウベブツ、その他名も知れぬ湾内には、太地、土佐の南海には姿を見せたこともない長大な克鯨が群游し、食に飽いてその処を去らず、夥しい数は弁別することもできない有様であった。休漁期に大挙渡道すれば、巨利を博することはたやすいと、近太夫たちははやりたった。

だが、新宮藩の協力を俟っても、蝦夷捕鯨を実現しうる巨費を調達することは不可能であった。井原西鶴の「日本永代蔵」に日本十大分限者の一として描かれ、また厖大な富を擁する熊野別当家と姻戚を組み、紀南に君臨した和田棟梁の曾ての栄光は既に色あせていた。

その後、年毎に大震災、大津波、三日ころり（コレラ）の流行病などの災厄が太地を襲い、やがて幕府の長州征伐がはじまり、鯨舟が動員される騒ぎがあり、維新となった。

明治七年、怱忙のうちに忘れ去られていた蝦夷漁場開拓を再度企てたのは、三十三歳の男盛りとなり覚吾と改名した和田伊織であった。彼は和歌山県令に蝦夷捕鯨の利を説き、賛同を得て、準備が整った上は政治面の便宜を得る口約を得た。

巨額の資金調達は、当時三井組と共に全国に覇を唱えていた大阪の金融業者小野組に仰ぐことにした。覚吾は金融ブローカーの知己を通じ、小野家主人の善助に会い、一万五千円の融資をとりつけることに成功した。条件は、捕鯨用具を一切抵当とし、捕鯨収入によって借入金を三ケ年間に返済するというものであった。

漁獲さえ順調であれば、借金の返済はたやすい。背美成鯨一頭より採れる肉の量は、牛二百頭分に及ぶこともあり、価格は二千円を越す。

鯨は、捨てるところのない動物といわれていた。肉質の部分はすべて食用になり、腸に至るまで美味である。鯨油は灯火の用にする外、食用、薬用に広く使われ、稲虫の駆除にも卓効をもてはやされた。筋、骨、鬚、歯牙は細工物の材料として珍重される。

太地鯨方が長い忍苦のトンネルを漸く抜け、再び繁栄の

どよめきをとりもどすことができると、誰もが待望し、覚吾を神仏であるかのように合掌して迎える老人さえいた。

ところが、融資金の受渡しを行う寸前に、小野組は降ってわいたように財政恐慌を来し、休業倒産の羽目に追いこまれた。

大蔵省が小野組に預託していた公金を取立てた処、小野組が急に応じきれず、信用不安が生じ他の預金者からの取立てが殺到したのであった。

覚吾は融資をとりつけるため多額の運動費を使い、北海道への出漁間近しと信じこんでいたため、大阪で調達できる漁具はすべて購入し、現地へ送りだしていた。その費用を捻出する目途はなく、やむなく鯨方の経営権を新宮の金融業者に移譲した。

新しい棟梁を迎えても、事業の経営は不振を極めた。浦人たちは宰領として頼ってきた和田家棟梁を失い、働く意欲を失っていた。

闇の底をあてもなく這ってゆくような、貧苦の三年が過ぎ、鯨方の人々はかすかな光明を得た。新たな金主を得た覚吾が経営権を取戻し、太地に帰郷してくることになったからである。

あのときは嬉しかったわいと、近太夫は記憶を辿る。大阪東横堀にある覚吾の仮り住いへ迎えの使者に立ったのは、太地の城山に紙細工のように白っぽい山桜がいまを盛りとはなびらをひらいていた三月であった。

「爺ま、よう来てくれたのう」

寓居の手狭な玄関に立った覚吾は、近太夫を見ると童子のように湧き出る涙を袖で拭い、近太夫もむつきの上から慈しんできた年少の主人のやつれた顔に、「若旦那、早よ帰って呉らよ」というなり声を詰らせた。

そのとき、近太夫はよろこびながら、なぜか前途の暗さを予感していた。天保山から汽船に乗り、紀淡海峡を南へ下る間も、海波の重畳に目をやりながら心が弾まず、うつろな思いを味わいつづけた。

近太夫は北海道操業の挫折で、太地鯨方の命脈は、ほぼ確実に絶たれたと考えていた。いまさら覚吾が棟梁の座に戻っても、冬場に南方を目ざす鯨の回游する数が激減したいま、多額の借財を抱えて鯨方が生きぬけるわけがない。慶長以来連綿と伝えられた太地網取漁法も、終焉は近いと彼は読んだ。

太地村は険しい山地を背に負い、他所へ行くには舟を使うほかには杣道さえない陸の孤島であった。いままで村民の命を支えてきた鯨方が消滅すれば、そのあとどのような生計の道が残されているか、近太夫には見当もつかない。一村の者がすべて他郷へ離散する運命が待っているのかも

知れなかった。
その夏は不漁に加え旱魃が浦人を苦しめた。戸毎に養蜂を営んでいるのに、採取した糖蜜はすべて仲買人に売払い、子供に与える余裕のある家はなかった。井戸水が枯れ、売水を買入れねばならなくなると、生計に事欠く祖母や母は、かわきを訴える小児にせがまれ自分の唾液を飲ませた。
皆が貧乏になり、渇え死にしても、祖先の墳墓を見捨てて逃散しても、すべて「おやさま」のお心にあることだからやむを得ないと、近太夫はあきらめていた。
十七歳で刺水主になって以来、近太夫は数えきれないほどの鯨を仕留めてきた。「生物は何でも死ぬんじゃもの、この世に未練を残して何すら」と彼は思う。血潮を中天に吹きあげ狂いたつ巨鯨の死を見届ける経験を重ねる長い年月のうち、彼のうちに命に対する執着が徐々にうすれてきていた。
物心つく頃から海に出て波のきらめきにかこまれ、動揺する舟板のうえを住いとしてきた近太夫には、海ときりはなされた生活は想像できなかった。天渡船という鯨舟の通称が、彼は気にいっていた。陸から眺めていると、遙かな沖へ出て海と空のあやちも分らない辺りで姿を消してゆく鯨舟が、天に渡るようにみえるところからつけられた名であった。

「沖合い、下り潮やよし」
佐一郎は、網舟にひるがえる白二本の吹流しを指さした。東南風は先刻より力を増し、梶取崎の沖から那智山の方角へ吹きぬける烈風は空の大半を覆った雨雲の形を忙しく変えていた。
近太夫は薄雲に包まれた陽の位置を眺め、時を計った。四つ半刻（午前十一時）と思われた。東北に流れる下り潮のときは、潮流が三本潮の強さでも、網が張りやすい。それに三輪崎の網代には、昼間の下り潮のとき、鯨が姿を現わす可能性が多い。三輪崎赤島の網代は、太地の東北四里のところにあった。
「赤島番へ行くか」
佐一郎はうなずいた。
近太夫は、舳に立ちあがり、白晒の指図旗を頭上にさしあげては三輪崎の方角へ倒す仕草をくりかえした。
「赤島へ行くぞおう」
佐一郎はささやき筒を口にあて、大音声を海面に走らせた。灯明崎山見で了解の法螺貝が微かに鳴った。
近太夫の胸に、今日は鯨が来るという希望が、不意に稲妻のようにするどく流れた。彼は息子の弥太夫が傍にいてほしいと、心もとなさを瞬間にあじわった。ふだん勢子一番舟刃刺を勤めている弥太夫は、いま和田家の使者として

大阪へ越年の金策に出向いていた。

「よおい、よおい、よおいとかんと。よおいよおい、よおい」

雨脚が繁く、水主たちは蓑笠から雨滴を垂らしながら櫓を漕いでいた。時刻は八つ半（午後三時）を過ぎている。船団は、鯨の片影さえ現れない三輪崎の赤島網代をあとに、灯明崎を目指して戻っていた。海面は日暮れどきのように黒ずんだ波頭を刻み、灯明崎が墨痕のように前途ににじんでみえた。

孫才次は、櫓を押す手の甲がかゆく、腕をあげるたびに、顎にこすりつけた。舟を漕ぐうち体があたたまると、しもやけにふくれあがった部分が、雨にうたれ寒風に吹かれ、血管が脈うっている。かゆみは徐々に増し、彼は身震いをしてこらえ沖に目をむけた。

騒ぎたつ波の重なりの彼方に水平線がみえ、そのうえに古綿のようにわだかまる厚い雲の層が、鯨の下腹に似た畝をつけ垂れ下っていた。

相番の清七は、孫才次の隣で顎から滴をしたたらせて漕いでいる。彼の険しい横顔を見ると、孫才次は自分の落胆をたしかめているような気になった。掛声のあいまにとっさの冗談を交すのが好きな水主たちの間にも、笑声は絶えていた。

那智の高峯が右手前に近づいてきた。

「待てやあ。おもかじ」

玉太夫が背後でするどく叫び、水主たちは櫓を前につきだした姿勢で静止した。

「執当、何よし」

鱸押しがたずね、玉太夫は前方を指さした。一番舟が二丁ほど前方で停止し、波に揺られていた。舳に近太夫が立ち遠眼鏡で沖の方向を眺めているのがみえると、玉太夫も素早く眼鏡をその方向にむけた。

風が空のどこかで笛のように鳴り、岩燕の群れが頭上を飛び去った。孫才次は「鯨じゃろか」と小声で清七にいい、相手は無言でうなずいた。雨にうたれる檜笠の下から、光る目が沖を見つめていた。

孫才次は息をつめて沖を見た。かなりの時間が流れ、何もいないのではないかと疑いがかすめたとき、遙かの波間に高く太い水柱が上った。「おう」というどよめきが孫才次をとりまいた。

水柱は間を置いて、また昇った。途中から二又に分れていた。

「二又の潮吹きやぞ。背美や、孫やん」

清七が激しく歯をうちあわせながら、昂った声できれぎれにいった。孫才次は、ふるえだした足を踏んばり、うなずいた。

勢子一番舟に鯨発見を示す白幡が立ち、舳が沖に向った。

「ひー、やー、ひー、やー」

甲高い急調子の掛け声が海上を伝わってきた。十五人の水主が櫓を手前に引くトリカジのとき、姿が一斉に船上から隠れる。後頭部が敷板に着くまでのけぞる全力漕法である。

一番舟は飛ぶように波を切り、注進舟が紅白縦割りの印をはためかせ、灯明崎めがけて走りだした。

「ほれっ、さっさい押しじゃあ」

血相の変った玉太夫の号令で、二番舟も風を捲いて舟足を早めた。

蓑を脱ぎすて晒襌と平袖半襦袢をつけた孫才次は、夢中で櫓を引いてはのけぞり、「ひー、やー」と掛声をかける。舟が動揺するたびに底板の狭い舟底で、共櫓を押している清七にいやというほど足の甲を踏まれ、反射的に踏みかえす。

今日は、俺の初陣や。かならず鯨の鼻切って誉れをたて、ゆきをあっと驚かひちゃるぞ。こんな時化に鯨を取るのは男冥利じゃ、度胸を見せて気ばらな、懸思（恋人）に会わす顔ないど。

孫才次は息を切らせ、猿のような叫びをあげながら疎らな考えをつなぎ、昂奮した。彼の脳裡には、捕獲した巨鯨を両側から挾んだ二艘の持双舟を先頭に、意気揚々と松明をかかげて帰港する船団の光景が鮮かに描かれていた。

岸には出迎えの老若がざわめき、轆轤場の前では女たちが扇子を手に踊っている。鯨の返り血を浴び、頭から蘇芳をかぶったようになっている刃刺たちを従えた近太夫が、群衆をかきわけ和田覚吾の前に出て膝まずき、「そもそも本日の鯨は」と古式に従った捕獲経過の報告をする。群衆のなかから、ゆきの熱い視線が血に濡れほとびた俺の姿をとらえている。

十七で鯨の鼻を切れば、俺は立派な男じゃ、と孫才次は自分を励ますように考え、不意に恐怖が胸を締めつけにくるのを感じる。

瀕死の鯨の鼻に綱を通す穴を明ける「手形切り」の作業は、ひとつ手順を誤れば刺水主の落命につながる危険極りないものであった。それは刃刺の予備軍である刺水主が、かならず通過しなければならない関門である。

数百の水主たちを、思うがままに使役する権限を持つ刃刺職は世襲制で、和田宗家と共に数百年の盛衰を重ねてきた。刃刺の長男だけが十三歳から十数年間、刺水主の資格

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com